

「2017 年度秋学期授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長 大西秀之

はじめに

今回は、2017 年度に行われた「授業に関するアンケート」の改定後、2 度目の実施となりました。したがって、現在の形式と内容によるアンケートが、通年で実施されたこととなります。

授業に関するアンケートの改定は、その時々を大学を取り巻く内外の状況や要請に対応するため、さまざまな試行錯誤がこれまで重ねられてきました。前回 2017 年度に実施された大幅な改定は、「教育の内部質保証」、「学習成果の可視化」、「知識の創出・自主学習」などのキーワードに代表される、昨今の大学改革を意識し前提としたものとなっています。くわえて、2017 年度の改定では、ディプロマ・ポリシーに掲げる到達目標の達成度の測定と学生の学修行動の把握を重要な目的と位置づけ、アンケートに「授業改善」、「学修行動」、「到達目標」の3区分を設けることにより、学生の理解度を意識した授業展開とフィードバックの計測を強く意識しています。

こうした授業に関するアンケートの改定は、率直に申し上げるならば、大学の認証評価に対する取り組みでもあることは否定できませんが、実際、アンケートの結果は、各学科のディプロマ・ポリシーの達成度を測るエビデンスともなり、大学の認証評価に活用することが大いに期待できます。

授業に関するアンケートは、個々の授業の改善を第一義的な目的としています。このため、この総評は、個々の科目のデータを学科単位で集計し分析したものに基いて作成していますが、学科全体として授業内容の現状把握と改善点の確認とともに、一人ひとりの教員が自らの授業を学科や大学全体の教育のなかでの位置づけを意識しながら、改善に向けた取り組みを行うための参考にしていただくことを期待しています。

以上のような目的の下、今回の総評では、前回の春学期に引き続き、各学科科目及び共通学芸科目、キリスト教・同志社関係科目、外国語科目、スポーツ・健康科目、教職科目の各科目区分（以下、「学科等」という。）単位で行っていただいた分析を基に、特に到達目標の達成度に注目して学科間で比較を行いました。これに加え、今回は、各学科等からご提出いただいた報告に対するコメントを付記いたしました。この目的は、コメントの内容と評価が妥当であるか否かは別として、各学科等が個々の授業に対する評価の何を重視しどう評価を下しているか確認するとともに、それらの異同を明らかにすることにあります。換言するならば、今回新たに付記したコメントは、アンケートの結果や評価が、個々の授業改善の寄与のみならず、各学科等にとっても自己点検の一材料にしていれば、との期待に根差したものとと言えます。

授業に関するアンケートは、個々の授業を担当されている教員個人をはじめ、関係各所の多大な負担と努力によって実施されています。そうした負担と努力は、ひとえに時代の要請に応じつつ、より良い授業を目指し改善して行くためにほかなりません。その意味でも、本総評が、一人ひとりの教員あるいは各学科等がより良い授業を追究し、ひいては本学の総合的な教育力を高めるための一助となることを期待いたします。

アンケート結果の集約・分析評価について

今回の授業に関するアンケート総評は、次の i から iii のステップを踏まえて作成しています。

i. 授業に関するアンケートの集計は、別冊「2017 年度秋学期 授業に関するアンケート実施結果報告書」にまとめられています。その他、個々の科目（クラス）の集計は、当該授業担当者に配布されています。

ii. 教員コメントを専任教員に限って全員に記載していただきました。教員コメントは、アンケートの質問項目ごとにコメントを書き添えていただく形式のものですが、個々の科目ごとではなく、教員 1 名につき 1 枚にまとめて記入していただいています。

iii. 学科等の授業評価報告を各学科等の責任者の方に記入していただきました。各責任者は、当該学科等の個々の専任教員からのコメントや集計結果を基にして、学科等全体としての授業改善、学生の学修行動の把握、学科等としての到達目標の把握に努めていただきました。

(1) 「授業実施に関する質問」の結果について

1. 授業内容はシラバスに合っていましたか

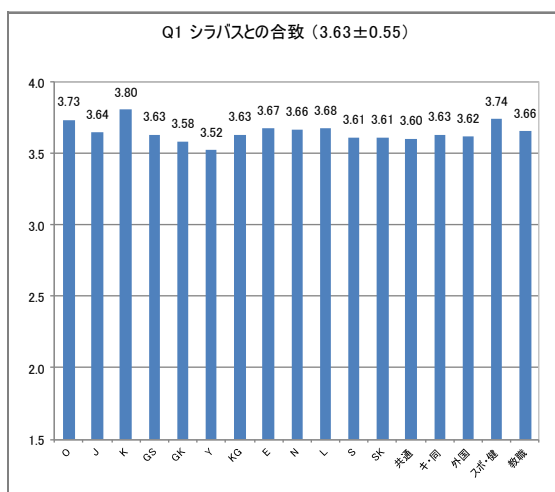
全体結果について

「Q1 シラバスとの合致」は、すべての学科等で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が 90% を超えていました。この結果から、前回 2017 年度の春学期に引き続き、全体的な傾向としてほとんどの授業でシラバスに沿った内容が提供されていたと評価できます。いくつかの学科等の報告では、個別授業のなかに低い評価となった授業があったことが指摘されていましたが、その理由が的確に分析されていました。シラバス通りに授業が提供されていることは、学生にとっても教員にとっても「当たり前」と受け止められている傾向が進んでいると推察されます。このため、シラバスの変更が行われる場合は、当該授業の受講生に対し変更の理由を説明することが、「当然の義務」と認識すべき状況になっていると思われれます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な数値結果か、他学科などとの平均の比較で評価しているものがほとんどでした。そのようななか、音楽学科と社会システム学科では特定の科

目に注目し改善の必要性などを、また社会システム学科や食物栄養科学科では今回得られた結果に対する分析や全体的な改善の取り組みを、それぞれ記載報告されていました。こうした評価は、今回のデータに対する是非を超え、授業に関するアンケートの有効な分析・活用として、他の学科等にも参照できる事例になるかと思えます。



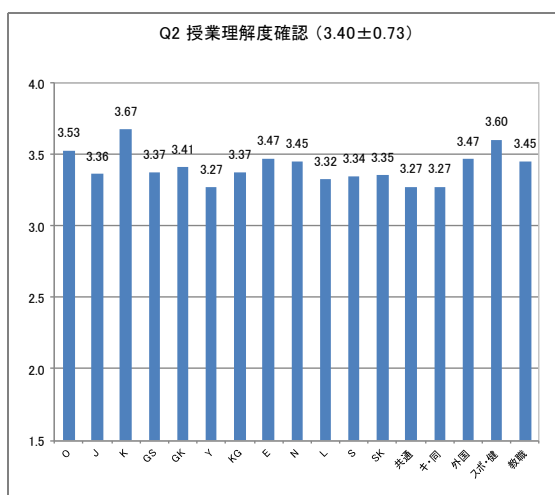
2. 受講生の理解度を確認しながら授業が進められていましたか

全体結果について

「Q2 授業理解度確認」は、すべての学科等で「4 思う」と「3 やや思う」の合計が、前回 2017 年度春学期と比較して 10%以上も上昇し、全体で 80~90%以上となっていました。また集計結果から、前回と同様に受講者数の多い講義形式が多い学科等では、「4 思う」の評価が下がる傾向が認められますが、その格差は小さくなっている傾向が指摘できます。こうした結果は、ひとえに一人ひとりの教員及び各学科等が取り組まれた授業改善の賜物にはかならないと評価できます。なお学科等からの報告では、今回も様々な取り組みが行われていることや、その成否などが指摘されていました。理解度を確認しながら授業を行う方法は、授業形態・受講者数・学生の資質などにより、それぞれ異なることが予想されますが、今後とも試行錯誤を繰り返しながら、より良い方法を模索して行くことが不可欠になると思われます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、今回得られた結果に対する分析や全体的な改善の取り組みを、比較的多くの学科が記載報告されていました。こうした報告記載から、各学科等において受講生の理解度を確認した授業運営・進行の必要性が意識されていることが窺われました。



3. 授業レベルは自分に合っていましたか

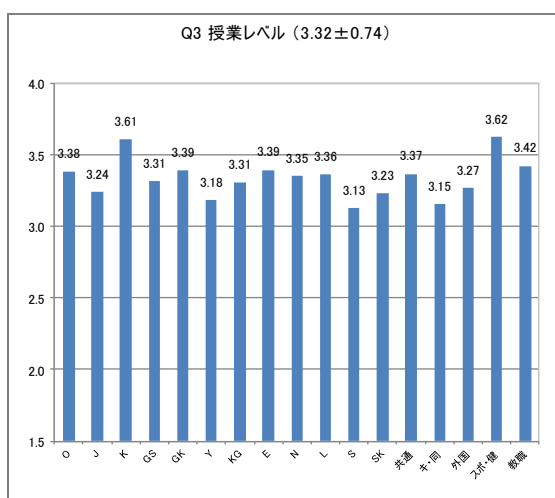
全体結果について

「Q3 授業レベル」は、「4 思う」と「3 やや思う」の合計が、90%を上回った国際教養学科科目とスポーツ・健康科目をはじめ、その他の学科等でも 70~80%以上とな

っていました。集計結果から、国家試験対策など一定水準の知識の習得が求められる一部の学科では、前回同様に「4 そう思う」の評価が下がる傾向が少し認められますが、これも授業の目的が反映している結果かと推察されます。またそうした傾向は、学科等の報告でも指摘されていました。授業の目的から、レベルの調整が難しいケースに関しては、カリキュラム全体や授業外でのフォローなどの取り組みも必要になるかと思われませんが、いくつかの学科ではそうした対策の取り組みが報告されていました。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、授業レベルを学生に合わせられる学科等と、資格試験の取得を前提とされている学科等で、本質問そのものに対する評価・位置づけに大きな違いが示されていました。また日本語日本文学科などからは、授業レベルが「合っている」という回答を得ることが、果たしてポジティブに評価すべきことなのか、という疑義が呈されていました。授業に関するアンケートは、決して高評価を得ることが目的ではなく、時代の要請に対応しより良い授業を実現するための参考資料に過ぎないものです。それゆえ、授業に関するアンケートの質問内容や結果を、どのように活用するかも積極的に各学科等で検討していただければと考えています。



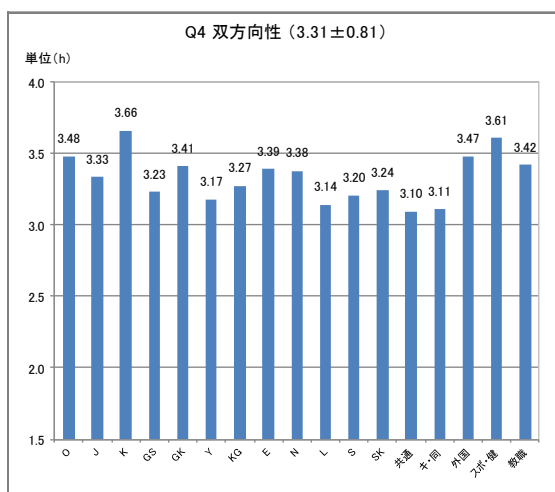
4. 教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされてきましたか

全体結果について

「Q4 双方向性」は、「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が、90%を上回った国際教養学科科目、外国語科目、スポーツ・健康科目をはじめ、その他の学科等でも70~80%以上となっていました。集計結果から、前回と同様に受講者数の多い講義形式が多い学科等では、「4 そう思う」の評価がやや下がる傾向が認められました。ただアンケート結果から、そうした授業であったとしても、全体的な傾向として改善が進んでいることが窺われます。また学科等の報告でも、積極的に双方向性を意識した様々な授業実践が試みられていることが、具体事例を交え少なからず提示されていました。そうした取り組みが進んでいることから、本学学生にとっては、今後双方向的な授業が特別なものではなくなってくると予想されます。このため、どのような授業形態であれ、双方向性を意識した工夫を盛り込むことが、それぞれ具体的な方法に違いこそあれ一層求められる、との認識を持つことが必須になると思われまます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な数値結果か、他学科などとの平均の比較で評価しているものがほとんどでした。また授業の目的によっては、双方性が取り辛い科目があることを指摘している学科もありました。そのような傾向のなか、食物栄養科学科などをはじめいくつかの学科では、具体的な取り組みや今後の改善方法などを提起されている事例がありました。むろん授業改善は、双方性の確保ありきではありませんが、こうした分析は双方性が難しい科目にとっても、有益な視点をもたらすものと評価することができます。



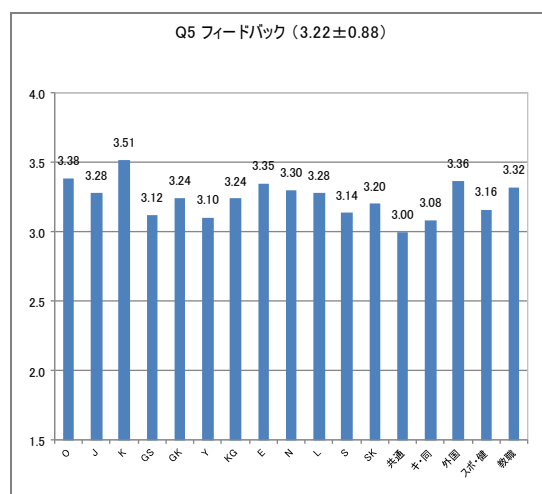
5. 提出物に対するフィードバック（採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われていましたか

全体結果について

「Q5 フィードバック」は、「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が、55%であったスポーツ・健康科目を除くと、その他の学科等では70%前後～80%となっていました。この結果は、前回と比較すると、全体的な傾向として確実に改善していたことから、それぞれの学科等で積極的にフィードバックを意識した授業実践を推進されたご努力の賜物にほかならないと思います。受講者数や授業形態によっては、取り組みに様々な制約があると思われませんが、受講生に対するフィードバックの推進は避けられないと予想されます。もっとも、そうした取り組みは、教員の負担を増加させることから、それを少しでも軽減するためマナビーやTA・SAなどの授業補助を大学全体として活用して行くことが不可欠であると考えています。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、どの学科等でも具体的な実践事例が記載されていました。特に食物栄養科学科では、具体的な実践事例とともにその効果についても分析されていました。こうした分析は、フィードバックの学習効果を把握した授業改善に繋がると評価することができます。

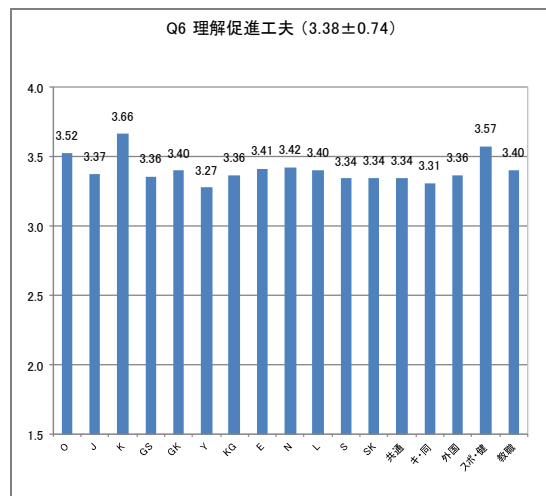


6. 言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか 全体結果について

「Q6 理解促進工夫」は、前回に引き続き、すべての学科等で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が 80～90%以上となっていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業で言葉以外によって理解を促す工夫が行われていたと評価できます。前回の総評でも言及させていただきましたが、マルチメディア機器をはじめとする授業補助機材の活用などが、受講生にも担当教員にも一般化したことの結果であると推察されます。なお前回に続き、一部の学科等からは、Q4 の双方向性や Q5 のフィードバックとの関連する工夫や取り組みの具体事例の報告がありました。そうした情報は全体で共有する必要がありますと考えています。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な数値結果か、他学科などとの平均の比較で評価しているものがほとんどでした。更には、ほとんどの学科等で具体的な事例が記載されていたことから、言葉以外で受講生の理解を促す工夫の必要性が意識されていることが窺われました。



7. 自主学習を促す工夫がなされていましたか 全体結果について

「Q7 自主学習促進工夫」は、前回と同様に「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が 50%前後～80%以上とバラつきが認められたものの、ほとんどの学科等で 70%前後の結果となっていました。この結果から、受講者数や授業形態によって取り組みや工夫が異なることが推測されるものの、全体的な傾向として引き続き多くの授業で自主学習を促す努力がなされていたと評価できます。前回の総評でも指摘しましたが、この質問項目は Q4・Q5・Q6とも関連するものであり、各担当教員の様々な工夫や試みによって学生に自ら考える機会が提供されていることの反映と推察されます。昨今の入試改革によって、初等教育から高等教育までの学校現場で、自ら思考する力を養うためのアクティブ・ラーニングの必要性が急速に高まっているなか、大学全体として一層の取り組みが求められる課題になると思われます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な数値結果か、他学科などとの平均の比較で評価しているものがほとんどでした。また具体的な取り組み事例をあげられている学科等に加え、自主学習の批判的視点を交え、あり方そのものの意義を問いかけている指摘もありま

した。自主学習を目的とするのではなく、なんのために受講生に課し、それがどのような学びの意味があるのか、常に問いかけることこそが、授業改善ひいては大学が担うべき教育のあり方を考える上で必要になると思われま

8. 工夫してほしいと思ったことを選んでください（複数選択可、なしも可）

全体結果について

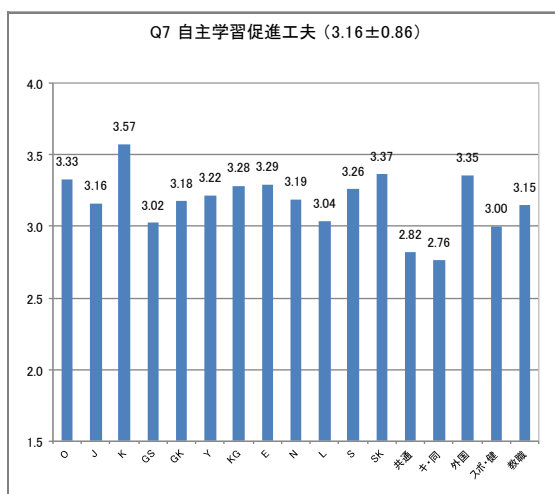
「Q 8 工夫してほしい項目」は、前回 2017 年度春学期と同じく、パワーポイント・話し方・配布資料などで、ほとんどの学科等で類似した結果となっていました。これらの項目は、本学の受講生にとって学科等更には授業形態の違いを超えた、改善要求の対象として要望されていることが確認できました。他方、マナビーや教科書は、学科等で比較の数値に差異があり、それぞれの授業の形態・実践・目的などを反映している、とこれも前回の傾向と同じく推察されます。実際、学科等からの報告では、同じような数値でも、それぞれ受講生からの要望に違いがあることが読み取れます。なお残りの項目では、私語対応よりも公平性に対する数値に違いが認められました。また公平性に対する要望は、比較的少人数授業が多いと予想される学科等で前回と同様に高くなる傾向が認められました。これも先の総評でしてきたように、むしろ大人数による講義形式よりも少人数で行う演習形式の方が、教員や受講生同士の関係性が密になることが反映している可能性が追認されました。以上から、Q 8 の各項目の結果は、授業形態ごとの運営の参考にもして行くことができると思われま

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、比較的多くの学科等で受講生から寄せられた要望に対して、それぞれの分析や批判的検討を加えられていました。いうまでもなく、こうした分析や検討は、単なる受講の要望の追認に陥らず、授業改善ひいては大学が担うべき教育のあり方を考える上で必要になると思われま

9. この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらいの時間をかけましたか 全体結果について

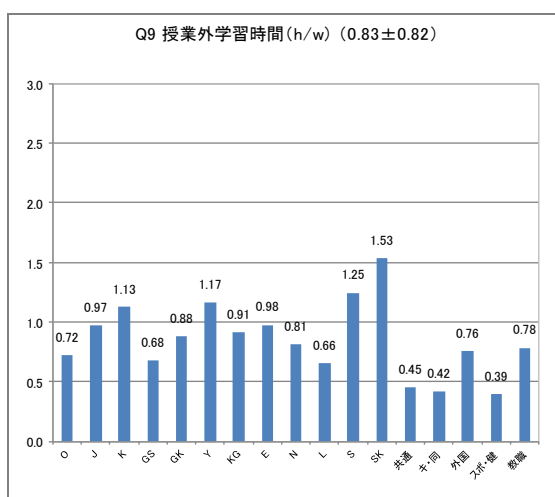
「Q 9 授業外学習時間」は、まず国際教養学科、医療薬学科、英語英文学科、食物栄養科学科管理栄養士専攻を除く学科で、30 分未満が 50%前後～60%となっていました。また外国語科目と教職科目を除く各科目区分では、30 分未満が 80%前後～90%となっていました。まずこの結果は、学習時間が短い学科等では講義形式の授業が多いこと、また相対的に学習時間が長くなっている学科等には演習形式などの授業が多いことが反映していると推



察されます。一方、学習時間が長い4学科2科目区分は、到達レベルが明確にスコア化されている国家資格試験や語学検定試験などを、前提・目的とした授業が多いと思われます。授業外学習の必要性に関しては、従来から大学教育に対して指摘されている課題であります。もっとも、前回の総評でも指摘しましたが、学習時間に関しては、ただ闇雲にテストの機会や課題を数多く出すことで改善すべき問題ではなく、どのような目的でどんな学習を受講生に取り組んでもらいたいのか、当然授業ごとに異なることと思われるため、今後学科等の枠組みを超え大学全体で議論して行くべき重要課題であると考えています。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体の数値結果よりも、具体的な課外の学習時間に関する多様な意見が記載されていました。自主学習でも指摘したように、学習時間の確保を目的とするのではなく、なんのために受講生に課し、それがどのような学びの意味があるのか、常に問いかけることこそが、授業改善については大学が担うべき教育のあり方を考える上で必要になると思われます。



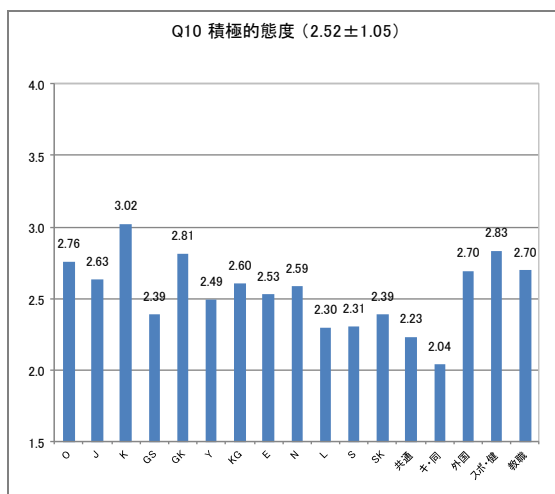
10. あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか

全体結果について

「Q10 積極的態度」は、「4 と思う」と「3 ややと思う」の合計が 12 学科・3 科目区分で 40%前後～60%代と、前回 2017 年度春学期よりも向上していました。この結果は、ひとえに一人ひとりの担当教員や各学科等における取り組みの賜物にほかならないものです。受講者数や授業形態によって、異なる取り組みのあり方が求められるなか、個々の授業ごとの違いに対応し改善したことは高く評価される結果と考えています。なお前回の総評でも指摘しましたが、この項目は、Q 4 双方向性の工夫などとも深く関係すると推測されることから、異なる質問項目をクロスチェックすることで、授業改善の方向性を今後とも探って行く必要があると考えています。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な数値結果よりも、具体的な取り組みの事例や授業形態ごとの是非などが記載されていました。このような傾向から、数多くの学科等で



学生が積極的な意見を述べることを必要な授業実践と認識されている、ということが窺われました。ただし、英語英文学科などからは、そもそもすべての授業に必要なものであるか、という批判的な意見がありました。とはいえ、今後ともアクティブ・ラーニングの必要性が高まってくることが予想されるとともに、授業の目的や形態によって異なってくるため、各学科等に応じた取り組みを志向していく必要があると考えています。

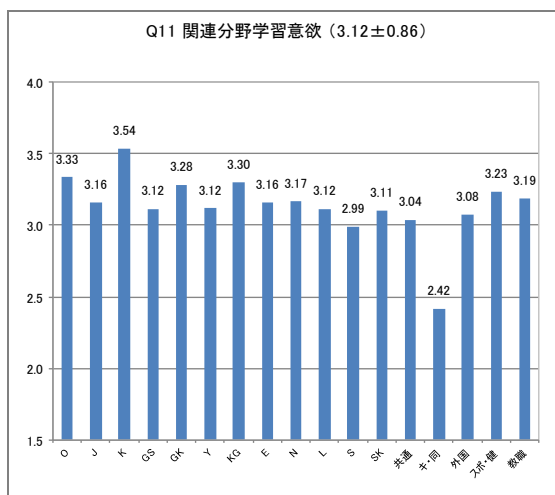
11. あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習を更に深めたいですか

全体結果について

「Q11 関連分野学習意欲」は、前回 2017 年度春学期と同じく、キリスト教・同志社関係科目を除く学科等で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が 70%～90% となっています。この結果から、引き続き全体的な傾向として、ほとんどの授業で本学学生の学習意欲を高める内容が提供されていたと評価できます。なおキリスト教・同志社関係科目に関しては、学科を越え全学共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われる。ただそれでも、前回と同様に 40% を超える結果であったことは、受講生に本学の理念が伝わっている反映であると思われる。むしろ、このキリスト教・同志社関係科目での学びを、各学科等で如何に継承して行くかは、本学全体のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにかかわる重要課題である、と前回の総評に続き認識しています。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な数値結果を分析されている報告と、この項目事態の是非を検討されている報告がありました。まず前提として、カリキュラムに必修の割合が高い学科等と、自主的な選択の比率が高い学科等では、受講生の履修の動機に大きな違いがあると推測されます。こうした条件の違いを考慮し、受講生に対して学習への動機づけをどのように行うか模索することが求められると思われます。



12. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか（複数選択可）

全体結果について

「Q12 履修理由」は、6 学科等で「授業内容」の選択率がトップで 50% を超えていました。これに対して、これ以外の 11 学科等の「授業内容」の選択率は 10～30% で、また「授業内容」の採択率がトップでなかった 7 学科等の選択率のトップは「必修」と「資格」でし

た。こうした結果は、前回 2017 年度春学期と基本的に大きく変わっていませんでした。なおシラバスで「授業内容」をしっかりと説明することは、「必修」が少ない学科等は言うまでもなく、「必修」が多く「資格」取得を目指す学科等においても、その内容を受講生に明示することによって積極的かつ能動的な授業の履修を促すためにも重要との認識が求められます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、科目区分では数値結果の分析に基づく評価が多かったのに対して、各学科ではそれぞれのカリキュラムに基づく評価が提示されていました。この結果は、Q11 と同様に必修の比率あるいは自主的な選択の比率の多寡が多分に影響していると推察されます。こうした背景を考慮に入れ、各学科が評価されていることが窺われました。

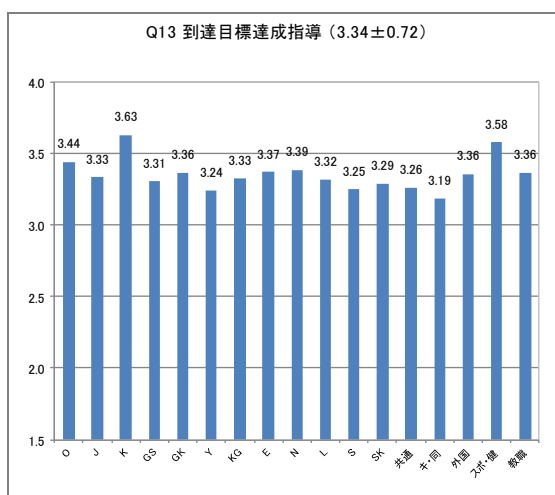
13. 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか

全体結果について

「Q13 到達目標達成指導」は、前回 2017 年度春学期と同様にすべての学科等で「4 と思う」と「3 ややと思う」の合計が 70～90%以上となっていました。集計結果から、担当教員が授業の到達目標を的確に示すとともに、それを受講生の多くが比較的良好に理解できていたと推察されます。もっとも、この結果は、単に授業内での説明のみならず、授業実施に関する Q 1～7 の工夫や取り組みの蓄積として得られるものと思われまます。そういった意味で、各授業担当者は、受講生の資質や要望を見極めながら適切に対応した授業を行うことが、今後とも求められると思われまます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、数値結果の分析に基づく評価が全体的な傾向として多くありましたが、一部の学科ではそれぞれの目的・視点に基づく評価が提示されていました。この結果から、一部「学生の受け身な態度を助長する」という批判が呈していたものの、到達目標に基づく授業実践の必要性が認識されていることが窺われました。



14. あなたは到達目標を達成できたと思いますか

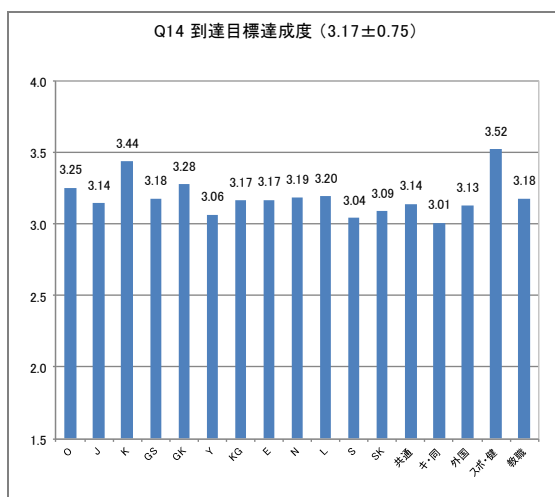
全体結果について

「Q14 到達目標達成度」は、2017 年度春学期と同様にすべての学科等で「4 と思う」と「3 ややと思う」の合計が 70%前後～90%となっていました。この結果は、Q13 と関連するもので、担当教員が到達目標を的確に示し、それを受講生も理解していたからこそ得

られたと推察されます。むろん、どれほど受講生が理解できていたとしても、到達目標の設定が適切でなければ達成という評価が得られることはないため、各担当教員が受講生を目標レベルまで導く授業を行った結果の賜物と評価できます。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、Q13と同じく科目区分では数値結果の分析に基づく評価が多かったのに対して、各学科ではそれぞれのカリキュラムに基づく評価が提示されていました。特に各学科の報告からは、受講生自らが到達目標と達成したとする自己評価をどのように判断しているか、それぞれ考え方の違いが反映していることが窺われました。繰り返しになりますが、たとえ同じ質問項目でも、学科ごとのディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに照らして評価していただき、それぞれ授業改善をしていただくことが望ましい姿であると考えています。



15. DWCLA10 の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください

全体結果について

「Q15 DWCLA10 の獲得」は、2017 年度春学期と同様にほとんどの学科等で「分析力」と「思考力」が高い選択率となっていました。この2項目は、ある意味で学習として基本となる能力であるため、当然の結果と思われまます。これに対して、「想像力」・「プレゼンテーション力」・「コミュニケーション力」は、受講生が少人数や演習系の授業が多いと推察される学科等で選択率が高く、逆に必修の多い学科等で選択率が低くなる傾向が認められました。この結果から、授業形態や受講者数が項目の選択率にある程度関係している、という予想されていたことが前回に引き続き確認できました。残りの5項目のなかで、「思いやる力」に関しては、現代こども学科科目・看護学科科目・食物科学専攻科目・キリスト教・同志社関係科目・スポーツ健康科目・教職科目などで高い選択率を示していましたが、これは授業の目的を反映した結果であると思われまます。なお「リーダーシップ」・「変化対応力」・「自己管理力」・「自己実現力」の選択率が低くなっていますが、DWCLA10 の習得はカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに深く関係することから、カリキュラムを検討し全体の習得を達成できる授業を配置して行く必要があると考えています。

学科等コメントについて

なお各学科等からの報告では、全体的な傾向を数値などから評価されているものと、ポジ

ティブ的であれネガティブ的であれ、具体的な項目に注目して評価されているものがありました。DWCLA10 に関しましては、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに深く関連する問題でもあるため、学科や科目区分ごとにも評価や位置づけは当然変わってくるものと思われます。このため、授業に関するアンケートから得られた結果を、どのように評価しどう活用して行くか、それぞれ検討を深め授業改善に活かして行く必要があると考えています。

<凡例>

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目	L	人間生活学科科目
J	情報メディア学科科目	S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
K	国際教養学科科目	S K	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
G S	社会システム学科科目	共通	共通学芸科目
G K	現代こども学科科目	キ・同	キリスト教・同志社関係科目
Y	医療薬学科科目	外国	外国語科目
K G	看護学科科目	スポ・健	スポーツ・健康科目
E	英語英文学科科目	教職	教職科目
N	日本語日本文学科科目		